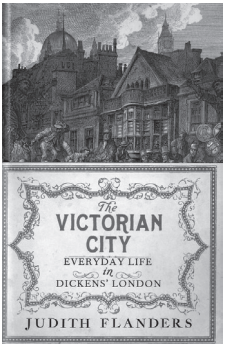
書　評



Judith Flanders, *The Victorian City: Everyday Life in Dickens' London*
(London: Atlantic Books, 2012)

中和　彩子

著者ジュディス・フランダーズは、*A Circle of Sisters: Alice Kipling, Georgiana Burne-Jones, Agnes Poynter and Louisa Baldwin* (2001) を皮切りに、*The Victorian House: Domestic Life from Childbirth to Deathbed* (2003)、*Consuming Passions: Leisure and Pleasure in Victorian Britain* (2006)、*The Invention of Murder* (2011)、そして本書に至るまで、ヴィクトリア時代の文化・社会の諸相を、浩瀚な文献を渉猟して描き出してきた著作家である。本人のウェブサイト (http://www.judithflanders.co.uk/、2013 年 8 月 20 日閲覧) によれば、演劇・舞踊・現代芸術について *Sunday Telegraph*、*Guardian*、*Spectator*、*The Times Literary Supplement* に寄稿するジャーナリストでもある。

本書の目的について、著者は次のように述べる。

> ［ロンドン］の変化に伴い、何が想像の産物であり何がルポルタージュなのかがぼやけ、区別が難しくなった。ディケンズの読者たちが理解できたジョーク［……］は、われわれの目には見えない深いところに埋もれている。本書はこれらの細部を今一度浮かび上がらせる試みである。ロンドンの通り (streets) をディケンズや同時代のロンドン市民が見たように見つめ、ロンドンという都市の仕組みや働きを調べ、要するにディケンズの生きていた 1812 年から 1870 年に見えたままの都市を、散歩する試みである。　(pp. 12–13)

この試み自体は、新しいものではない。「ディケンズとロンドン」もしくは「ディケンズのロンドン」をめぐる著作は、ヴィクトリア朝文学・文化研究において一ジャンルを成している。研究書から、観光案内を兼

ねた読み物まで。ディケンズやその著作の批評的研究から、本書のようにディケンズの著作を通じて風俗・生活・社会にアプローチするものまで。Andrew Sanders によれば「作家の没後まもなく、彼の知るロンドンがまだ取り壊されず、爆撃を受けず、再開発もされぬうち」から現在に至るまで、間断なく出版され続けている (*Charles Dickens's London,* London: Robert Hale, 2010, p. 236)。

類書の少なくない中で――内容的に最も似通っているように思われるのは、Michael Paterson, *Voices from Dickens' London* (2006)［マイケル・パターソン『図説　ディケンズのロンドン案内』山本史郎監訳、原書房、2010］だ――本書の際立つ特色は、一貫して「通り (streets)」に注目した記述になっていること、そして、その内容に見合うように、いわば遊歩的に構成されていることにある。

第一部 (Part One: The City Wakes) の全四章は、早朝の出勤風景を描き (1. Early to Rise)、都市の喧騒を生み出す道路に着目し (2. On the Road)、さまざまな交通手段の特色と変遷を追い (3. Travelling (Mostly) Hopefully)、地方への旅の手段が駅馬車から鉄道へと移るさまを詳述する (4. In and Out of London)。

第二部 (Part Two: Staying Alive) では、さまざまなマーケット（5. The World's Market）から、街頭の物売り、労働者、浮浪者へと目が向けられ (6. Selling the Streets)、こういった貧民の置かれた苛酷な状況が多面的に語られ（7. Slumming）、餓死以上にあり得たのが有毒な飲み水による死であるという著者の見解を経由して、水にまつわるいくつもの話が繰り出される――今よりはるかに多かった川、霧、水質汚染問題、健康のために人々が通った公衆浴場、衛生・コレラ・墓地不足の問題 (8. The Waters of Death) 。

第三部 (Part Three: Enjoying Life) の最初の章（9. Street Performance）では、街歩きの楽しみ、商店街のさまざまな商店、店の看板や広告、新聞、物売りの声、通りで聞かれるコックニーの面白さ、そこから話転じて、通りで人々を楽しませる職業的なエンターテイナーたちが紹介される。続く章では、広場、公園、ティー・ガーデン、川での船遊びにフィッシュ・ディナー、グリニッジやバーソロミューに立つ市、といった、より大がか

りなレジャーが紹介される (10. Leisure for All)。屋外で食べることは多くの人々にとってなじみの行為であったというつながりから、街の通りで売られる軽食や飲み物、次いで、さまざまな種類・業態のレストランや飲食物の販売店について詳述される (11. Feeding the Streets)。最後に、野次馬や観衆を集めて通りを「劇場」に変えた出来事、事故や惨事、公式行事が具体的に物語られる (12. Street Theatre)。

第四部 (Part Four: Sleeping Awake) は、夜と暗黒の世界を扱う。パブやクラブといった男性限定の娯楽、男女問わず魅了された街のイルミネーション (13. Night Entertainment)、通りで起こりうる暴力沙汰——過去の遺物のはずの決闘、暴動、犯罪、さらし台、公開処刑（とその終焉）——(14. Street Violence)。最終章 (15. The Red-Lit Streets to Death) では、ロンドンの売春の実態がまとめられたのち、自死や、自死の現場としての川をめぐる言説が紹介される。そして、ディケンズが作品の原動力とし続けると同時に、人生・生命そのものとして捉えていたロンドンが、最後の小説『エドウィン・ドルードの謎』においては、彼自身の精力が尽きたことを暗示するかのように死の影の掛かる都市となり、テムズ川だけが生の表象になると、著者は解釈する。しかし、これをもってロンドンとの関係を終わりにすることはディケンズの望むところではなかっただろうと著者は思いやり、代わりに、『リトル・ドリット』の結末、主人公たちが「ディケンズ一家の手ひどい屈辱の舞台、マーシャルシー監獄のそばの古い教会で結婚し」、ロンドンの通りの喧騒の中へ下りていく場面を提示する (pp. 423–24)。

19 世紀ロンドンの諸事実が、著者の力技によって、大きな流れをもった読み物として組み立てられている本書は、一気に通読して初めてその魅力を解することができるだろう。しかし学術書にはない魅力を認めたうえで、いくつかの問題点を指摘しておかねばならない。最も気になるのは、上記の梗概にも一部反映されているように、話の展開の仕方にしばしば強引さもしくは緩さが見られることだ。顕著な例として、第十五章、売春婦から自死へと話題を転換するためのつなぎとして、売春婦には、病死や自死によって早世するというイメージが押し付けられていたことに触れるところ (p. 418) が挙げられる。

著者独特の足取りに戸惑うこともしばしばだ。一例を挙げておこう。出勤風景を描いた第一章で、コーヒースタンド (coffee stall) やパン屋が早朝から店を開け、人々に朝食を提供することが詳述されている。外で購う朝食の話はこれで網羅されているのかと思いきや、食べ物商売についてまとめた第十一章でコーヒーショップ (coffee shop) というものが登場する。労働者階級向けのものもあり、「多くの労働者が、自分の部屋と仕事先との間に、性に合った行きつけの場所を見つけようとした。毎朝、コーヒースタンドに行く代わりに［より贅沢だが］そこに立ち寄るのである」(p. 293)。

ディケンズの著作、同時代人のヘンリー・メイヒューやジョージ・オーガスタス・サラ等によるルポルタージュからの大量の引用、また、章によっては二次資料からの引用も、一様に事実として扱われ、当時のロンドンの「現実」の再現に用いられる。しかし、それらの引用がしばしば断片的すぎること、特段の理由もなく言い換えを施して地の文に組み込まれることがあるのも、学術書でないとはいえ、正確さを求めたい読者としては厄介に感じる。

例えば、以下の文章の、下線部。

> In *Sketches by Boz*, a stranger in Seven Dials is faced with <u>alleys that ‘dart in all directions’ before they vanish into an ‘unwholesome vapour’</u>, like a ship at sea moving into the foggy distance. (p. 183: 下線は評者)

本書の巻末注に従って参照した原文は、‘the streets and courts dart in all directions, until they are lost in the unwholesome vapour’ であり、船の譬えも従えていない。

また、二次資料の参照についても不適切な場合がある。第十五章の冒頭で、著者は、「ほぼ 19 世紀を通じてロンドンの通りに立っていた売春婦の確実な人数がわかっていないということは、いくら強調しても足りない。第一に、『売春婦とは何か』という問題がある」と述べ、その定義の曖昧さや複雑さを縷々説明したのち、Michael Mason の研究書 (*The Making of Victorian Sexuality*, Oxford: Oxford UP, 1994, pp. 76–78) からデータをまと

める (pp.393–94)。しかし、売春婦の定義の複雑さゆえに推定人数に相当な幅が存在するという説明は、実は Mason 自身がここで行っている。著者がごく近接した箇所でわずかに参照している Judith Walkowitz の研究書 (*Prostitution and Victorian Society: Women, Class and the State*, Cambridge: Cambridge UP, 1980, p. 14) も、同じ頁で売春婦の定義の曖昧さを論じていることを考えあわせると、著者の引用の仕方は恣意的であると言わざるをえない。